IAU International Conference 2024

世界80の国・地域にある高等教育機関200校から320人が参加

11月22日から24日まで、四谷キャンパスでInternational Association of Universities（IAU）主催の国際会議「IAU International Conference 2024」が開催された。本学はホスト校を務め、約80の国と地域から約320人の参加者を迎えた。

IAUは、高等教育の多様性と国際化の推進を担う国際的な会員組織。約600の教育機関や団体が加盟しており、曄道佳明学長はアジア太平洋地域の理事を務めている。

本年度のテーマは「変わりゆく世界における大学の価値」。3日間を通じて、30人以上の研究者が講演やパネル討議を行った。本学からは経済学部経済学科の青木研教授と総合人間科学部教育学科の杉村美紀教授が発表を行った。

本会議では、技術革新が高等教育に与える影響、学問の自由や研究の誠実性の重要性、地政学的緊張が高まるなかでの大学の社会的責任などについて議論された。また、グローバル社会の課題解決に貢献する教育研究活動をさらに強力に進めていくことが改めて確認された。

23日には、在学生や教職員による日本文化や研究内容を紹介する企画が行われ、好評を博した。文化紹介では課外活動団体の箏曲部による演奏や少林寺拳法部の演武が披露されたほか、学教職協同プロジェクト「ピアカフェ」主催のブースでは、折り紙や書道、けん玉などを楽しむ場が設けられた。また、短期大学部の宮崎幸江教授、理工学部情報理工学科の中筋麻貴教授、表千家茶道部による紀尾井亭ツアーおよび茶道体験も実施され、参加者は和の空間と茶道文化を堪能した。

24日の閉会式では、ホスト校を代表して曄道学長が挨拶し、2025年度IAUのルワンダ大学での開催が発表された。曄道学長は、「日本の大学が国際的なコンソーシアムに参加し、世界の大学と連携して情報発信を行うことは、日本の高等教育の国際競争力を維持・向上する上で重要だ。今回の会議が新たな国際連携や協働の可能性を探る貴重な機会となったことを大変嬉しく思う」と述べ、開催を振り返った。

世界各国から100名以上の学長が参加

国内外の研究者が多彩なテーマで議論

紀尾井亭での茶道体験は大盛況

新たなエグゼクティブ教育の実現に向けて

カリフォルニア大学バークレー校 Haasビジネススクールとの短期コースを実施

12月9日～12日の4日間、Sophia Future Design Platform（SFDP）推進室とUC Berkeley Executive Education（Haas School of Business内、以下Berkeley Haas）共催による短期ビジネスコース「Innovation Boot Camp」を開講した。

UC Berkeleyはビジネス、科学、技術などの分野で世界をリードする全米トップの公立大学。Berkeley Haasはシリコンバレーでの経験豊富な教員陣と、最先端のイノベーションおよびアントレプレナーシップ教育で知られる同校のビジネススクールである。

本学では、産学協働の学びの場を創成する企業会員制の講座「プロフェッショナル・スタディーズ（PS）」の会員企業の意見などから、大企業におけるイノベーション創出に関するプログラムへの需要を把握。同分野の研究・教育において世界トップレベルを誇るBerkeley Haasに共催を呼びかけ、新たなエグゼクティブ教育の実現に向けて本コースを企画した。

Berkeley Haasからは、組織の柔軟性やダイナミックリーダーシップ等を専門とするDr. Homa Bahramiと、企業の成長、イノベーションやAIの戦略的展開等を専門とするDr. Saikat Chaudhuriが参画。本学からは、シリアルアントレプレナーであるとともに、世界銀行グループなど複数の組織でリーダーや役員を歴任した西口尚宏特任教授が講師として参加した。

主な受講者は、PS会員企業および本学関係企業の役員、部長、若手幹部候補層。金融、製造、運輸、建設業など17社から32人のビジネスリーダーたちが集った。

1～3日目は、Berkeley HaasのDr. BahramiとDr. Chaudhuriがケーススタディやグループディスカッションを交えて講義を実施した。講義は双方向で進行し、受講者たちが所属企業の実情や課題について発表した後、講師がそれを普遍化した課題に置き換え、解決策となり得る知見やアイデアを共有した。

西口特任教授による最終日のセッションでは、参加者が所属企業ごとのグループに分かれ、ディスカッションを通して全3日間の学びを体系化した。また、本コースの集大成として「2035年に輝いている自社のプレスリリース」というテーマで各社がプレゼンテーションを行った。その後の修了式では、受講者に本学とBerkeley Haas連名の修了書が手交された。

各日のプログラム終了後には、参加者同士の交流の場が設けられ、業種や職種を越えた人脈作りの場となった。受講者からは、「大企業におけるイノベーションというテーマと講義の内容、他業種の方とのコミュニケーションの組み合わせが非常に良かった」、「シリコンバレーの成功者の立ち位置だけではなく、既存企業の戦略を考えることで自社の立ち位置で考える訓練ができた。企業の強みを認識することができ自信になった」などの感想が寄せられ、好評のうちに終了した。

セッションは常に双方向で進行

ディスカッションで自組織の現状と課題を再認識する参加者

8年目を迎えた学生と教職員の協働イベント

ソフィア・ダイバーシティ・ウィーク

多様性理解の中で自らのアイデンティティとステレオタイプを探る

ダイバーシティ・サステナビリティ推進室は、毎年11月25日の女性に対する暴力撤廃の国際デーから12月10日の世界人権デーまでの期間（12月3日国際障害者デーを含む）をソフィア・ダイバーシティ・ウィークと位置づけ、毎年さまざまなイベントを行っている。学生と教職員が協働し、多様性を受け入れる共生社会を目指して8年目を迎える今年は、6つの対面イベントと5つの期間中常設展示企画を実施した。

今年のテーマは「アイデンティティとダイバーシティ」。全プログラム共通で参加者に多様性理解の中でアイデンティティやステレオタイプについて考えてもらうことを目的とした。例年にない取り組みとして、学外者や企業との連携企画が多数実施され、福祉×アート×ビジネスで新たな文化を創ることを目指す株式会社ヘラルボニー協力のワークショップや、女性の体型に合うメンズライクなスーツブランドKeuzes（クーゼス）代表田中史緒里氏の講演、Netflixシリーズ“THE BOYFRIEND”に出演のAlan Takahashi氏によるトークイベントなどが実現した。

27日に行われたヘラルボニー協力の「体験型ワークショップ」では、参加者が、言葉を話せない、耳が聴こえないなどのマイノリティ役とマジョリティ役に分かれ、チームを組んで高難度の謎解きゲームに3時間をかけて挑んだ。冒頭に、謎を解くには「異なる者が向き合うことが重要だ」とルールが説明され、参加者は皆チームメイトへの配慮に努めたが、次第に「謎を解きたい」気持ちと焦りが強くなり、それぞれの立場で、誰かを取り残している、あるいは、取り残されていることを体感した。講師を務めた同社の菊永ふみ氏は「障がいに配慮することは当たり前で、その先にある、個人の強みを生かし最大化するということこそ重要だ」と語った。

今年度のダイバーシティ・ウィーク学生実行委員長を務めた竹村駿一さん（外英3）は、「学生の参加ハードルを下げることが重点課題だと感じ、企業参画やゲストスピーカー招聘などに取り組んだ。イベントが華やかになる一方で、社会問題に素朴に取り組むダイバーシティ・ウィーク本来の在り方にはこだわりたく、バランス調整に苦心したが、苦労が実り多くの方にご参加いただくことができた」と語った。

ヘラルボニーコンテンツクリエイター菊永ふみ氏による体験型ワークショップの様子

Sophia Open Research Weeks 2024

―上智大学研究機構主催―

今年度は11月5日から24日まで行われ、研究機構下の研究所・センターの他、附置研究機関、研究プロジェクトなどから、専門分野や、移民・難民、AI、SDGsなど、近年話題の研究トピックを紹介する合計21の企画が行われ、高校生を含め学外からも多くの来場があった。また、若手研究員による報告会や、理工学研究科の大学院生のポスター発表など、次世代を担う研究者の発表、交流の場ともなった。

今年度の新たな試みは、研究推進センターURA（University Research Administrator）による展示イベント「Sophia100人論文」。これは、1枚の画像と3つの項目（「私の研究はこんな感じ」、「こんなこと知りたい、話し合いたい、教えてほしい」「このことなら私に聞いて」）で構成されたポスターに、来場者がポストイットやシールでコメントや反応を行うことで、分野を超えた研究交流と連携を促進するもの。自由な議論のためにポスター掲示もコメントも匿名で行われた。発表募集の呼びかけに対し、学部生から教員まで、文理を超えた60の研究ポスターが集まり、期間中は200人を超える来場があった。多彩な研究分野が広く認識される機会となった。

6号館1階で行われた「100人論文」展示